



第十月号

「秋」から考えること

校長 齋藤幸之介

まずはじめに、秋の交通安全週間では、町会の方々、PTAの方々には、早朝よりお力添えを賜り、誠にありがとうございました。おかげ様をまぎわしてこの間子供たちは一層安心して登下校ができました。また、例えば子供たちの横断歩道の渡り方や信号の長さ等について御意見を伺うこともできました。警察等に御相談を申し上げながらも、諸事情によってなかなか改善が難しいこともありますが、私共の指導によって変容が図れることも多くあります。子供たちのさらなる安全を叶えるべく、教職員一同取り組んでまいります。

さて、今年は残暑も比較的穏やかでここ数日吹く風も爽やかに感じますが、いかがでしょうか。子供たちも学校生活の様々な場面で、秋を味わっています。水泳指導を終え、今はプールサイドや体育館で体を動かして、走ったり跳んだり鉄棒で技を磨いたりする体育学習が行われています。「スポーツの秋」が展開されてくるのです。

教員の問いかけに聞き入り、観察や実験、資料の読み取り等を通して自分の考えをノートにまとめ、これを基に話合ひの姿も見られます。「学習の秋」を子供たちなりに体験しています。

給食の食卓が空になりました。と報告を必ず必ず必要等級もありません。昔ながらの子供たちが楽しんでいる給食を食べています。「食欲の秋」を味わっています。

子供たちは、朝読書を始めて、国語学習の時間を中心として本に親しんでいます。本校では、今年度は全校で一冊冊を読破して、図書委員を中心と

発行所 港区立芝小学校
〒105-0014
港区芝 2-21-3
[TEL:03-3456-3072](tel:03-3456-3072)
[FAX:03-3456-3071](tel:03-3456-3071)



取り組んでいます。リーディング・アドバイザー・スタッフの皆さんにも御協力いただき、子供たちが使いやすいように学校図書館を整えていただいています。その中で、絵本を楽しむ子もいれば、文学作品に没頭している子もいます。

「本を読む」とは「千葉雅也先生から学ぶこと」

私は、先日「勉強の哲学」(千葉雅也(立命館大学准教授)著 株式会社文藝春秋)という本があることを知りました。現在、多くの大学生に読まれているそうです。この本は、「勉強とは、自己破壊である」という表現から始まります。「回調圧力」、筆者の表現では「周囲のノリ」、つまりみんなと同じことをやることを避けること、範囲を狭められていた限界を破り、人生の新しい「可能性」を開くために勉強する、という内容なのです。そのため、例えば、自分の従っているコト(法則や慣例など)を客観視する、疑ってみる、そして、コトに対して見える、見方を覚えることが必要であると述べられています。薄学な私にとっては難解で、改めて読み返さうとも思っています。子供たちがこれから学ぶために大切なことを多く学べると思えています。

その中に、本を読むことについても書かれています。読むべき本の質や読み方などが示されています。例えば、学問の本に出くわしたとき「これは難しければ、自分自身の感覚に引きつけて理解しよう」といって、と書かれています。千葉先生は、そもそも「これは自分のために読んでいるのか、他人の目を気にしているのか、あるいは、実感に合わないことを書いておいて当然然で、さしつかえなく、なにかを学ぼうとするのか、それ勉強、と迷っているのか。」と述べられています。

このことを山極壽一先生(京大文学部)の雑誌「文芸春秋」11月号(2017年)の特集(1)110-117の対談で次のように聞いています。



「知識は「人から人へ」、あるいは「本から人へ」というルートで伝わってきます。しかし、今の学生は先生から教えられたり、わざわざ本を読まなくても、ネットで検索をすればそこから簡単に知識を得られるようになってきた。」

そして、

「今の学生は、本の読み方すら知りません。本来、読書とは、筆者の世界に浸って楽しむものです。でも、本を情報源としてしか捉えていないため、内容を部分的にしか理解せず、興味のある箇所や利用できる部分にばかり目が入らない、つまり、本全体と自分を対峙させることなく、常に筆者や本の世界観との距離があるのです。」

と述べています。千葉先生も

「つまり読書(や講義)への出席(は、自分の領地としての自分の身体を破り、一時的にでも他人の物語や知識体系に入っていくこと、今までは違う進路になる経験だ、ということ)です。」

と述べています。私は今、正直聴すかしい思いがしています。

「一冊ありある」読書の秋

本の世界に浸る、他人の物語や知識体系に入っていき、いろいろな経験は重要であると思えました。このような経験は決して楽ではありません。しかし、学ぶ、というものは、辛いことなんでしょう。そして、そのために読書に没頭することは貴重であります。

もちろん、本への接し方は様々なあります。趣味やジャンル、そして年齢に合った一人一人の本への関わり方を大切にしながら、ときに等しいことを意識させ、意味ある時間を過ごすの大切さを伝えていきたいと思います。